

令和元年6月20日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21469

研究課題名(和文)「歴史の現代性」と「芸術の普遍性」 クローチェ思想を読み直す

研究課題名(英文) Contemporaneity of History and Universality of Art in Croce's Philosophy

研究代表者

國司 航佑 (Kunishi, Kosuke)

京都外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：10760324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は、「芸術の普遍性」、「歴史の現代性」という二つの概念に着目しつつ、ベネデット・クローチェの美学と歴史学の関係を検証することであった。『文芸批評』(1894)から『詩人の読解』(1950)に至るまでのクローチェ美学の変遷を検証し、クローチェが1)論文「芸術表現の全体性について」(1918)において「芸術の普遍性」という概念を確立させたこと、2)1912年の『美学入門』から通時的ではない新たな「歴史」を論じるようになったこと、の2点を明らかにした。さらに、クローチェ思想が同時代の歴史学に与えた影響について、我が国におけるクローチェの歴史思想の受容から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで我が国においては、クローチェの美学と歴史学の両分野を射程に収めた研究はほとんどなされてこなかった。そうした状況下で、この問題に正面から取り組みつつ両者の密接な関係を証明したことは、クローチェ研究の新たな一歩を踏み出す成果として評価できる。

その上で、クローチェ歴史学が20世紀前半のヨーロッパの歴史家に与えた影響を検証することは、今後の課題となる。

加えて、上記の研究成果について、今後イタリア語で論文を執筆し、イタリア本国での発表を計画している。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research project was to analyze the relation between "Universality of Art" and "Contemporaneity of History" in Benedetto Croce.

Through the analysis of his aesthetic works from "Critica letteraria" (1894) to "Lettura di poeti" (1950), I found out two facts: 1) the concept of "Universality of Art" began to appear after his article "Il carattere di totalita' dell'espressione artistica (1918); 2) Croce began to use the word "History" in a specific way (other than the diachronique meaning) in "Breviario di estetica" (1912). In addition, through the analysis of the reception of Croce's thoughts in Japan, I examined its impact on the Historiography of 20th Century.

研究分野：イタリア文学ヨーロッパ思想

キーワード：クローチェ 芸術 普遍性 歴史 現代性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内の研究動向及び位置づけ

我が国においては、全ての真の歴史は現代史である というテーゼそのものはよく知られているが、『歴史叙述の理論と歴史』に関する踏み込んだ研究はいまだ見られない。

(2) 本研究に関連する国外の研究動向及び位置づけ

ガラツソは、1909年から1917年に至る『歴史叙述の理論と歴史』の複雑な執筆・改稿の過程を詳細に分析しており、同時期に執筆された(膨大な)他のクローチェ作品との比較検討の必要性を強調している。だが、クローチェがどのようにしてそれを着想したかという問題については解答を提示できていない。

2. 研究の目的

(1) 1903年から1914年までのクローチェの文芸批評の活動を辿り、芸術の「普遍性」という概念がどのように形成されたかを特定する。

(2) 1893年の『芸術の全般的概念に還元される歴史』から『歴史叙述の理論と歴史』にいたるクローチェ歴史学の発展を辿りつつ、途中「歴史の現代性」に類する(あるいはその元となる)発想が現れていないか確認する。

(3) クローチェが『歴史叙述の理論と歴史』の執筆依頼を受けてからイタリア語版を出版するまでの間に目を通した歴史書等に当たる。これらの中で、彼の歴史観に影響を与えた作品の存在の有無を検証する。

(4) 『歴史叙述の理論と歴史』の執筆・出版の過程を執筆原稿と執筆に関わる伝記的資料を参照しつつ、厳密な比較検証を行う。またイタリア語版に先立って発表されている関連記事、イタリア語版単行本そしてドイツ語版等、様々なエディションの間の相違を分析する。

3. 研究の方法

平成28年度 クローチェの文芸批評活動の検討を行い、次いで、クローチェの歴史哲学の変遷の分析およびクローチェの読書体験の検証を通じて、本研究の仮説を反証しかねない要素の洗い出しを行う。

平成29年度 『歴史叙述の理論と歴史』の執筆・出版過程の分析を行う。

平成30年度 ここまでの研究の結果を総合しつつ、クローチェは、文芸批評の活動を通じて「歴史の現代性」という着想に至った という仮説の妥当性を検討する。

4. 研究成果

(1) 芸術の「普遍性」概念がクローチェ美学のうちどのように形成されたかという問題について、文学史という概念/方法論に対する彼の態度の変遷を辿ることによって次のことを明らかにした。すなわち、1918年の論文「芸術表現の全体性について」において芸術の「普遍性」を強調するようになったこと、また1912年の『美学入門』以降、「歴史」という単語に特殊な意味を与えるようになったこと、の2点である。以上の研究成果は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕および〔学会発表〕に結実した。

(2) 1912年の『美学入門』の段階でクローチェの「歴史」概念に変化が生じているという研究結果を踏まえつつ、『芸術の全般的概念に還元される歴史』から『歴史叙述の理論と歴史』までのクローチェの歴史思想の発展を辿った。そして『美学入門』の直前に執筆された『論理学』(1909)および『ジャンバッティスタ・ヴィーコの哲学』(1911)のうち、クローチェ歴史学のターニングポイントを特定した。両作品の詳細な研究は今後の課題となるが、この研究成果の一部は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕において発表している。

(3) 『歴史叙述の理論と歴史』にいたるまでのクローチェの読書体験については、まず1912年の『美学入門』に表された新たな歴史の定義(「歴史は作られるsi fa storia」)に注目した。そして、クローチェがその直前に取り組んでいたヴィーコの『新しい学』の研究が決定的な影響を及ぼしたことを明らかにした。その研究成果は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕に結実した。

新たに浮上したクローチェ歴史学と『新しい学』に関係をめぐらる問題については、現在『新しい学』の精読を進めている最中である。

(4) クローチェの思想が同時代の歴史学に与えた影響について、主に我が国におけるクローチェ受容の歴史を考察した。そこで、羽仁五郎および平泉澄という正反対のイデオロギーをもつ二人の歴史家に、クローチェの歴史思想がそろって甚大な影響を及ぼしているという奇妙な現象を明らかにした。そしてそれを「歴史の現代性」というクローチェ思想のもつある種の多義性に由来する現象とみなす解釈を提示した。以上の研究成果は、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕および に結実した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

國司航佑、イタリヤ文学史 ベネデット・クローチェ、天野恵先生退職記念論文集、招待有、2018、pp. 300-317

Kosuke KUNISHI, *Il liberalismo di Benedetto Croce nel Giappone prebellico* (戦前の日本におけるクローチェの自由主義), *Libro aperto*, 招待有, 2017 年 3 月号, 2017, pp. 115-120

國司航佑、第 2 次世界大戦下の日本におけるクローチェ思想の受容、京都外国語大学研究論叢、査読有、89 号、2017、pp. 39-53

〔学会発表〕(計 1 件)

國司航佑、ベネデット・クローチェと 文学の歴史、関西イタリア学研究会、2017 年 8 月 27 日

〔図書〕(計 1 件)

國司航佑 他、英名企画編集、ベネデット・クローチェ生誕 150 周年記念シンポジウム論集「越境する学問」、2018、p. 3, pp. 89-103

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

インタビュー記事：Dialogo con Kosuke KUNISHI (國司航佑との対話) in Francesco Postorino, *Mimesis, L'altro Croce*, 2018.

講演：國司航佑、ベネデット・クローチェとは何者か、日本イタリア会館、2016 年 6 月

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）:

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。